青森県の円空仏

笠原幸雄

昭和卅六年円空ブームたけなわの頃、当時の弘大人文社会学会で円空に関して口答発表したが、あれからほゞ十年を経過した今日、円空ブームもすっかり下火となり、代ってかっての木喰ブームが再燃したりしたが、それも今は余り人の口にも上らなくなった。当時県内で確認された円空仏は七体であったが、この十年の歳月の間に更に六体追加発見され、又新たな文献資料も発見されて、今や県内の円空関係資料はほゞ出尽した感がある。それら新発見の資料については、折に触れて資料紹介程度のことはやって来たが、未だ全資料をもとにしての総合的見解は述べていないので、たま〳〵与えられたこの機会に纒めておきたいと思う。

(一) 青森県円空資料

(a) 文　献

(1)菅江真澄「まきの冬かれ」寛政四年（一七九二）……東北、北海道旅行の途次嘱目した円空仏について記す。

(2)寺島良安「和漢三方図会」正徳四年（一七一四）……南部領焼山（天は恐山）の円空仏について言及している。

(3)大畑・村林源助「原始漫筆風土年表」文化十年（一八一三）……恐山参詣の際見聞した円空仏について記すところがある。

(4)むつ市田名部熊谷家「万人堂縁起」……寛文八年（一六六八）九月、熊谷家の先祖法号生岸源無居士の記した縁起の写本で、その原本は田名部常念寺に移っていた筈であるが、現存しない。その内容は「私は年来仏道を行じて来たが、その因縁によってかたま〳〵諸国遊行の僧円空という者が自宅に一ヶ月ばかり滞在し、その間に自ら観音像一軀を彫り残して去ったが、大変有難い像なので一堂を建て安置しようと思った。然し独力では及ばないので多数の人々の寄捨を仰いでよう〳〵目的を果し、円通寺の和尚を招き安置供養の法会をあげて貰った」という意味のことで、更に後書があり、この堂及び縁起、奉加帳一切を円通寺七世大英和尚の代に常念寺に寄附した旨を誌している。

(5)田名部常念寺「観音像厨子銘」……表記に「沙門円空作正観音尊像壱体」とあり、その下に本像が(4)の縁起に述べられた像であること、又厨子は寛政三年（一七九一）十二月、熊谷六世又兵衛平正賀によって不退山常念寺十世良慈上人に寄進されたものである旨を記す。ちなみに現在本厨子の中に納められている像は、円空仏とは全く違った作行の像で、その大きさも本厨子の像としては余りに小さい。多分いつの頃か本来の円空仏と入替えられたも

のであろう。

(6)三厩義経寺「竜馬山観音縁起」……義経伝説に円空を関連させて創作した、本寺の開創縁起で、円空の郷里を「越前国西川郡符中」とし、三厩での円空留錫を「寛永頃」として最も詳しいが之等はすべて誤りである。

(7)三厩義経寺・観音菩薩像背面墨書漢詩

「木像本何処青樹
成仏後経幾年数
唯今是仏心木心
化度衆生得化度
寛文七戊申仲夏中旬
朝岳遊楽子（花押）」

像自体は円空仏に間違なく、台座裏面の六観音墨書種字も円空自筆であるが、この漢詩は書体や花押の形からして円空のものとは思われない。更に寛文七年は戊申でなく丁未であり、戊を戊と誤記するなど、多分後筆であろう。

(8)弘前市立図書館「津軽藩日記」寛文六年一月廿九日条……「円空と申旅僧壱人長町ニ罷在候処御国ニ指置申間敷由仰出候ニ付其段申渡候へハ今廿六日ニ罷出青森へ罷越松前へ参由。」

之は昨年夏発見された最も新しい史料で、之によって円空は寛文六年正月弘前城下におったが、藩命によって追い出され、北海道に渡った事が明確になった。

(b) 仏　像

(1)下北郡佐井村・長福寺……十一面観音菩薩立像（高一八〇cm）
(2)下北郡恐山・地蔵堂……十一面観音菩薩立像（高一五六cm）
(3)　〃　……菩薩半跏像（高四四cm）
(4)むつ市大湊・常楽寺……如来立像（高一四六cm）
(5)弘前市新寺町・西福寺……十一面観音菩薩立像（高一七五cm）
(6)　〃　……地蔵菩薩立像（高一七三cm）
(7)南郡田舎館村・弁天堂……十一面観音立像（高一八〇cm）

(8)東郡三厩村・義経寺……観音菩薩坐像（高五二cm）
(9)東郡平館村・福昌寺……観音菩薩坐像（高四九cm）
(10)東郡蓬田村・正法院……観音菩薩坐像（高四九cm）
(11)青森市油川・浄満寺……観音菩薩坐像（高四四cm）
(12)西郡鰺ヶ沢町・延寿院……観音菩薩坐像（伝薬師如来像）（高四七cm）
(13)中郡沖館村・神明宮……観音菩薩坐像（高五一cm）

（註…(11)は他の観音像と違って宝髪がなく、一見如来像の如く見えるが、然し螺髪を刻まず毛筋を表わし、又台座背面に六観音種字を墨書するので、多分観音像として作られたものであろう。(9)は頭部が磨損した為後人によって改刻され、当初宝髪があったか否か分らぬが、地髪部に当初の毛筋の刻みが残っており、腹前に蓮台を持ち、更に台座背面に墨書種字の痕跡がかすかに認められるので、他の例から見て矢張観音像として作られたものであろう。(12)は寺伝で薬師如来と言い、又昔漁師の網にかかり海中より上ったと伝え「海上黒本尊」とも呼ばれているが、見た所海中をたゞよった形跡はなんら認められず、刀痕も鋭利に残っている。只「黒本尊」の名の如く、明らかに後世のものと思われる黒が全面に塗られている。然し本像には宝髪・蓮台があるばかりでなく、台座背面には後世の黒の下に、かすかに当初の種字らしきものが認められるので矢張観音として作られたものであろう）

〔〕 円空の県下滞在年次とその足跡

文献(8)により寛文六年（一六六六）正月頃、円空が弘前城下におった事は確められたが、いつ頃やって来、どれ位滞在していたか、又その間に仏像を造ったか否かはさっぱり分らない。只「御国ニ指置申間敷由仰出候ニ付」き城下から追放された事は誠に面白い。之は当時色々な性格の遊行僧・行人等が諸国を渡り歩いておって、中には盗みや詐欺や恐喝、又スパイ活動をするなど一般民衆からも幕府や藩からも余り歓迎し兼ねる輩が相当あった為で、寺々で行人を宿泊させてはならぬとの幕府の禁令が出されている程である。円空より後の木喰（享保三年―文化七年）が諸国を遊行した頃も矢張同様な事情にあって、寺に宿を頼んで断わられた時の感懐を述べた次のような歌を数首残している。「行暮て、はゞと(法度)もしらずこひければ、おしゃう（和尚）の心、やみぢなりけり」。円空の郷里岐阜地方の伝承によると、明暦年中（一六五五～一六五七）後西天皇が円空の高徳を聞かれて、上人位と金襴の袈裟を下賜されたというが、明暦年中と言えば東北遊行以前の事であるから、津軽藩とて左様な高名の僧を由なく追放する筈はあるまい。当時宗教界の一切は寺社奉行の指示によって動かされ、天皇といえども幕府を差置いて自由な行動は赦されない事状にあったから、幕府の統制下の枠外にあって、何処の寺院にも属さず遊行生活を送っていた円空如きものには、か様な天皇からの御下賜などとても考えられない事である。円空仏が有名社寺よりもむしろ、その由緒も定かでない地方無名社寺に多く残っているのも、彼の高邁な宗教心から発する庶民への布教活動の跡とばかり解するのでなく、幕藩体

制の中に入り得ず、社会の底辺に生きざるを得なかった必然の結果と、意地悪く考えて見るのも確かに必要と思う。

さて寛文六年一月廿一日に弘前を追われて青森に向った円空は、それからどうしたのであろうか。五来重氏「円空仏」（昭和四三年刊）によると、（本書の出た頃は未だ史料(8)は発見されていなかった）、それから津軽半島を歩き、先記の円空仏の遺る寺々に泊りながら造像し、その突端三厩から松前に渡り、寛文五、六年の頃北海道で布教と造像活動に従事し、寛文七年頃帰途青森県下で再度先記の遺像(1)—(7)を造りつゝ、夫々の像の遺る土地を通って秋田に去ったと考えておられるようである。要するに(8)—(13)像は渡道前、(1)—(7)像は渡道後と、二度の造像を考えておられるのであるが、この点は果してどうであろうか。北海道有銘像の最初の年記は寛文六年六月吉日で、それ以前でもっとも近い有銘像は寛文四年の岐阜郡上郡美並村白山神社像であるから、渡道前の青森滞在は先の文献(8)と併せ考え寛文五年末から六年初頭となり、北海道有銘像の最後のものは寛文六年八月十一日で、之につゞく有銘像は岐阜武儀郡上立保村白山神社像で寛文九年、そして田名部熊谷家での造像が寛文八年九月以前であるあら、帰途の青森留錫は寛文七、八年と見るのが最も自然であろう。然し県下の像が往還いずれの時に作られたかを知る文献は存在しない。所で五来氏は遺像(8)—(13)はすべて形式・様式・大きさの点でよく似通い、極めて近い時期に作られたものと考えねばならず、而も之等と同形式の北海道像と比較すると、後者がより完成された様式を示す上に、これらの像の分布が渡道前の足跡を示すものとして適当である。他方(1)—(7)像は、逆に北海道の同形式像より、様式・技法すべての点でより優れているから、之等は帰途における作と考えておられる。(1)—(7)像が北海道像より優れている点については多くの人が讃同する所であり、私も左様に見るので一応問題外として、五来氏の(8)—(13)像に対する見解には、私はむしろ逆の見方に立たざるを得ない。というのはこの類の像で五来氏が最高の出来と推奨される北海道熊石北山神社像は、私にはむしろ函館称名寺の同形像や先の(8)—(13)像が完成される一歩手前の像と見る方が、より妥当と思われるからである。例えば地髪部の鉢の開き（正面から見た場合、古いもの程この開きが大きいが、北山神社像はその初期的な開きを示している）、両袖の膝前にたるみかかっている曲線の形（北山神社像では、この曲線がもたついた鈍い感じに彫られれているが、函館・青森像では迷いのない明確に固定した曲線となっている）、目鼻立ちの特徴（完成された円空仏では、鼻が短く眼・口が其処にクシャ〳〵集中した全体に寸のつまった感じに作られるが、函館・青森像ではその特徴になり切っているのに、北山神社像は比較的鼻が長く間伸びした顔である）等がその証拠として指摘出来るのではなかろうか。とすれば青森県の遺像はすべて北海道からの帰途の際の造像となるわけである。尚(8)—(13)像はすべての点で余りによく似ており（材質まで）、一見何処の寺の像か区別出来兼ねる程である点、或は函館乃至は三厩辺で、たま〳〵適当な木材が多量に入手出来た際、同時に制作し、円空自身持ち運んだか、或は後人の手によって現在地に移されたかしたのではないか、とそんな想像もしたくなる程である。何れにせよ県内の像がすべて帰途の作だとすれば、その分布からして、寛文七年頃三厩に帰り、津軽半島を歩いて